

台湾の亭仔脚について

黄秀英

一、思いつき

亭仔脚のある台湾の家屋に生まれ育った私達は、亭仔脚のおかげで強い陽射しと雨から守られていることを、ごくあたりまえかのように、何とも感じないで自然とまでに見なしてきていましたが、亭仔脚のない外国からの観光客には「珍らしいですね、台湾にだけあるんですか」とよく聞かれて疑問を抱いていた頃に、日本文化の時間で中国と日本の家屋構造を勉強していたら、「騎楼ですか、面白いですね」との辺渡先生のお言葉にヒントをあたえられ、資料をまとめることにしました。

二、亭仔脚とは

台日大辞典によると、チエン亭。あづまや四阿。てい亭。リアン涼——りやうてい涼亭。チエンアア亭仔。ちん亭。あづまや東屋。チエンアアカ・ア亭仔脚。ていしきやく亭仔脚。のきした軒下。と、あります。

台日新辞書ではチエンア亭仔。アヅマヤ四阿。チン亭。キ・イ起——四阿ヲタテル。チエンアカ・ア亭仔脚。ノキシタ軒下。(市街地ノ家ノ道路側ノ一部ヲ歩道トシタル所)。又「台湾風俗」の片岡巖先生は「連続式家屋とは即ち市街の商店に見る所にして、相隣両家の隔壁は共通に構造せられ(之を公壁と称し、両家の共有に属す)其の幾多の家屋櫛比し、店舗櫓を並ぶるの街地には共通の櫓下行路を設け、之

を亭仔脚と称す」と述べています。(写真一)。上述のように台湾の亭仔脚というものは台湾建築物の特徴で道路に面した建物の軒に、

平屋なら「廂」を伸ばし屋根をつくり、二階以上の建物なら廊下にも似た天井のある二メートル内外の深さの通路をいったものです。「写真二」。領台時代は「亭仔脚」と呼ばれていましたがこれは大陸建築物の福建語、「チエンアカ・ア亭仔脚」からきたそうです。亭仔脚

楊梅鎮民初型亭仔脚



屋房鋪店型初民郷口湖

(写真一)

という名称は戦前に呼ばれ、戦後はこれを「騎楼」と呼ぶようになりました。中日大辞典にも「騎楼とはビルディング各層にある外に突き出

淡水重建街



(写真二)

た形のペランダ華南の建築で通りの歩道の上に突き出たもの、歩行者を太陽と雨から守る」とかいてあります。これで大陸では早くから「騎楼」と呼ばれていることがわかりますが、私が先年、ソウルや日本、アメリカ、カナダ、メキシコなどを旅行した時には、それが見当りませんでした、でも、ホンコン、シンガポール、サイゴンの華

僑街や大陸の南京から華南地帯、特にシャンハイ、広東、福建あたりにはそんな軒並みの亭仔脚が見られるとの事です。おそらく台湾の亭仔脚も大陸建築物の文化の影響を受けたものと見られます。その広さや深さも文化の発達と共により広く深く又実用的に伸ばされてきました。大溪、旧湖口、鹿港、あたりの亭仔脚は家と共に狭いが現代化された亭仔脚はずっと広く深めに伸ばされ、商店街をなしているようです。(写真三)

三、名称の由来

亭仔脚の字義について以下に亭仔脚の名称がなぜつけられたかという事について私なりの考えを述べてみます。漢和大辞典では、「亭」テイ、高の省略形(建物)、音符丁テイ(とどまる意↓停テイ)とからなり、人々のとどまりいこう建物の意を表わす。あづまやと、

綜合国語辞典では、「仔」

(写真三)

細心、仔細しさい、(くわしく。こまかに)の意をあらわし、又、「語尾詞」として、妹仔、柚仔、杙仔のように助詞にも使われます。漢和大辞典では「仔」ン仔



細。小さいもの、(広東カントンの方言)。とあり、又、「脚」キャク、あし、器物の下についてささえの用をなすものとあります。由に「亭」は人々のとどまり憩う建物であり、「仔」は「亭」の語尾詞として使い、別にこれという意味はなく、「脚」は「亭」の柱として支えの用をなすので「亭仔脚」という名称がつけられたのかとも思われます。一目見た感じで四阿、東屋に似ているのでそれから「亭仔脚」という名称もつけられます。亭に人が入り、ちょっと足を休め憩う、又、道ゆく人を休ませるばかりでなく、雨やどりにもなるので大陸では「亭仔間」と呼ぶ所もあり、台湾の「広東客家話」(広東語)では亭仔脚を「店亭下」と呼びます。

四、亭仔脚の構造

古い東屋は屋根をわらぶきに、柱は木材を使っていますが現在の東屋はセメントで固め、タイルや大理石を張り、古風な色彩に色どられた東屋となりました。(写真四、五)

庭園内の屋根と柱だけの休憩小屋を東屋という。(現代実用辞典より)

家屋つきの

亭仔脚は櫛比した建築物の

通りに面した間口の四つ角を煉瓦や鉄筋、セメントで円や、四角、八角などの柱を造り平屋は上が屋根となり二階以上の建物でしたら天井となつてその空



古いあづまや

現代的あづまや

間を人が通れるように造ります。様式には平面と拱形があり現在では建築技術が発達して表面や床にタイルや大理石をはるようになりました。民国初年頃の亭仔脚は富豪を誇る裝飾にこった亭仔脚がありましたが、建築業の企業化された今日では広さや深さも規格化され、実用的な亭仔脚となりました。

五、亭仔脚の使いみち

昔の亭仔脚は人通りが少いので子供の遊び場や、婦女たちの雑談の場所、又は夕涼みのいい場所、或は停留所がわりににも使われていましたが、商業文化の発達した現在では使いみちがずいぶん異なってきました、人通りは多くなり、溝に面した亭仔脚にはオートバイがズラリとおかれ、繁華街では己に商店街となっているようです、参考に台北市中華路の亭仔脚を例にとると、一区画あたりの一日の借用料は千円だそうです、駅前角でも五百円のがあり、新産品を発売すれば時には三十倍の売り上げがあるそうですから亭仔脚の価値も上ってききました。又、にわか雨にあった時、誰でも夢中で亭仔脚へ駆け込むでしょう、それは濡れずにすむからです、その為に亭仔脚を造ったのなら、よほど台湾も雨の多い島かも知れませんが、周囲を海に囲まれた台湾は冬は寒い北東季節風が吹き、夏は西南季節風が吹いて湿気がつのり雨となり、颱風も多いのです、気候も熱帯と亜熱帯に属して気温高く雨量も多いようです、又常夏の島といわれていますので夏季が長く太陽も強いわけです、こうして強い太陽や、雨、たまには豪雨などをよけるには「騎楼」「店亭下」といった「亭仔脚」のようなものが最適で或はその為に造られたものとも考えられます、そして北部へ行けば行く程、気候の関係で太陽の光りも弱く乾燥して雨が少い為に「亭仔脚」というようなものは必要ではないから見うけられないとも思われます。

六、結び

亭仔脚があると家の戸口から道路までに隔たりがあるので家を出る人たちに安全感をあたえることは確かでしょう、又、道ゆく人達を雨や陽射しから守り、現在では商店街にまでうまく造られた「亭仔脚」は台湾建築物の特徴として多くの観光客の目を引いているようです、特に交通の混雑なる今日では車道を歩まずに気楽な気持ちでゆっくり亭仔脚を歩むのもいいでしょう、又小供たちには日よけや雨よけばかりでなく普段の歩道としても一層大事な亭仔脚なのでしょう、こんなに親しまれている「亭仔脚」は昔に習って現在もそうであるように将来も台湾の建築物の特徴として永久に変わらないと思います。

〔附記〕

日本文化の授業で亭仔脚に関する資料を捜しあぐねていたある日、蔡所長先生なら御存じかも知れぬとお電話した所、「ウームそれなら中央図書館にある台日新辞書の五百何ページあたりに載っているはずだ。」とのお言葉に吃驚してさがしあてた時は「さすが日本語の大先生だけにページまでおぼえていらっしやる。」と深く感服せざるを得なかった。黄厚源先生より民国初年の写真をもらい、授業中には荒井孝先生より御指導いただき、又、拙文が東呉大学の「学報」に掲載されることになったのも、ひとえに日本語文学系主任、蔡華山先生のお取り計いによるもので、ここにあわせて諸先生方に厚く御礼申し上げます。